



—あの有名な古典落語の世界を
へんてこ、怖くて、可笑しな人形芝居に—

古典落語より

死神

脚色・演出／柴崎喜彦 美術／宮本忠夫 装置／児玉真理
音楽／高橋久美子(日本音楽集団) 照明／阿部千賀子
音響効果／吉川安志 江戸言葉指導／八光亭春輔

～ものがたり～

賭け事にあげられる貧乏な男のところへ、死神が現れた。
男は、死に取り憑かれた重病人たちを言われたとおり治していき、瞬く間に大金持ちへ。生活は一変し、横柄厚顔無恥へと変貌する。やがて金も全て失った男は、もう一度死神の元へ…。そこで死神がはなった言葉は…。



運と不器用と幸せと… 演出 柴崎喜彦

時折思ふ。人生というものは、シナリオに縛られていて、あがいたところで運を持っている奴には敵わないのではないかと。持っている奴は幸せに、持っていない奴はそれなりに…。仏教では、「縁起」ということを説き、例えば現在の幸、不幸は、過去世あるいは現世での良い悪い行ないの結果だと解される。人生は因果律によって支配され、努力やあがきではどうしようもないもの。運を“持っていない”ものは、幸せにはなれないのだろうか…。

人間は不器用だ。生きることも死ぬことも、自分の意思だけでは自由にいかないこともある。同じく不器用な人形たち。自分の意志では1ミリも動けない。だからこそ、そんな人形たちで不器用な人間たちを描いていきたい。軽妙に、ユーモラスに。人形たちの多様に変わらぬ表情が、舞台の上ではきっと心の動きを魅せてくれる。“持って”いなくともあがいた人間模様を魅せてくれる。

人は、何をもちて幸せなのか…。“幸せ”を絶えず望み、あがき、努力する。多分、そのあがいたことも人生にとつての幸せになり得るのだろう。生きるバイタリティー、生きていこうという意志、それが人の“幸せ”につながっていると信じている。